



TITLE:

獨逸の地理學界(三)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

---

CITATION:

寺田, 貞次. 獨逸の地理學界(三). 地球 1929, 11(1): 46-54

ISSUE DATE:

1929-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183544>

RIGHT:

てゐる地方の鳴らない事は無論である、これに就いてはもつと充分實驗する必要があると思つてゐる。

(6)遠賀河口山鹿浦の舊家の特殊な建築風

京大藤田文學士に教つた大陸式建築風の退化遺存物たる「家の隔壁(メンマド?)」は當地方では始めて此浦の舊家に數軒見出した、此所は所謂山鹿庄の根元地で芦屋(芦屋千軒の歌で有名

な)の對岸に在り、一度日本書紀に其の名を出して爾來一千餘年幾多の歴史を残し古來繁昌の地であつた、随つて古風な大陸式の建築(堅固な白壁の土藏様の家が多い)や整然たる市街のある事も當然であらう。

以上それ〴〵寫真などもあるが今はほんのありし儘の事實を略報するに留めて置かう。

## 獨逸の地理學界

(三)

寺田貞次

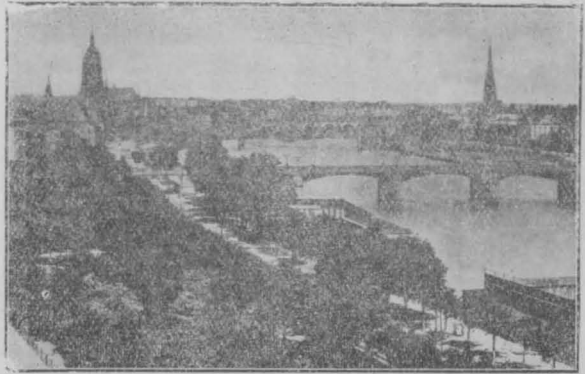
七、フランクフルト・アム・マイン大學

ハイデルベルヒから、フラレクフルト・アム・

マインに向い、同地の大學を訪ねる。ハイデルベルヒと異り最近の建築にかゝり、石造の壯大な建物である。地理は自然科學中に設置されて居る、玄關の左側階段を登るとインスチチュートに達する。講義室を除き、約八室を備えて居

る。戸を排すと、短い廊下があり、突當りが主任教授の室である。主任の *Walter Behnmann* 教授丁度授業を終られた處であつたので、心よく面會して下した。御室はからりとした廣い室で、中央に大きな卓子を置き、演習は此處で催される様子であつた。次室に通ずる戸の側に机を備え周壁には書棚雜誌棚を充たして居た。

圖 五 十 第

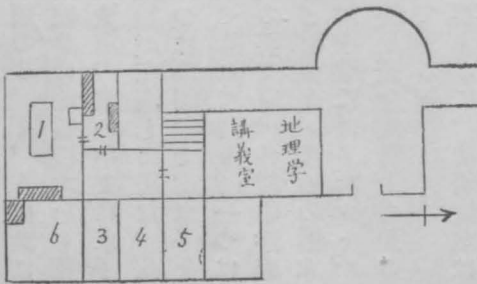


ンイマ・ムア・トルフクンラフ

ンヘンに學び、地理學、數學を究め、ワグナー  
バーチ、並にベンク等の助手として研究を重ね  
ニューギニアを探險し支那を視察し、後當大學  
教授となられた方で、東北大學の下斗米氏<sup>シモトマ</sup>今の

教授は  
稍肥滿の  
丸顔の上  
品な風貌  
頭髮は短  
くかられ  
て居た、  
氏は一八  
八二年オ  
ールデン  
ブルグに  
生れ、ゲ  
ツチンゲ  
ン、伯林  
並にミュ

圖 六 十 第



トーエチチスノイ理地

田中館秀三氏は其學友で、共にエキスカーショ  
ンに出かけた事もあつたと話して居られた、ニ  
ューギニアに關する小出版物など惠與下した。  
次の室は(第十六圖2)は極く狭い室で、Otto  
Maull教授の室である幸 Behrman教授の紹介で  
面會する事が出来た。充滿せる書棚の間に机を

置き、地圖に面  
して盛に研究中  
であつた。氏は  
最近 Politische  
Geographie を  
著はされた方で  
Arthur Dix氏の  
Politische Geog-  
raphieと並んで  
ラツツエル以後  
の名著と稱せら  
れて居る。教授  
は未だ四十前後

の少壯教授で極く元氣な風姿、快活に話された政治地理、歴史地理に關し御教示をあほぎ、ラッセルの流をくんで居る教授の事だから、同教授の遺族及墓所に付て御尋ねした處が、遺族に付てはフリードリッヒ教授の御話と一致して居り、墓所に付ては懇切に圖迄かいて説明して下した。御住所を尋ねると、獨逸も廣いから知らないとの答であつた。如何に大家であつても其遺族となると既に注意してくれる人がないものかと聊遺憾な感がした。

再、主任教授室にもごり、助手の案内で縦覽する。意外にも此の助手ときくのは、柏林大學フオーゲル教授歴史地理の研究室について此間迄居られ、同教室にて御世話になり、又先夏のペンク教授指導のアルペン・エクスカーションには一所にあるきまはつたグレー博士であつたのは大驚した。夫につけても、卒業後あーやつて單に歴史地理の方面許でなく、地形學の方をも實地に研究し、初めて檜舞臺にふみ出るのであるかと思ふと、偶然に考へるわけには參らな

かつた。

圖の3、4、5は共に圖書室で、(5)には地圖類並に地質標本をも蒐集されて居た。(6)は閱覽室、室の中央に卓子を壁には書棚を置き雜誌類が充満して居た、此他階上に尙二室ある。一つは地圖室で、卓子を置き製圖並に演習用に供せられて居り、一つは稍小さい室で、經濟地理の研究室、各種の浮彫圖や、標本箱、掛圖入などを備え、産物の標本なども多少集められて居た。壁にはメルカトルの古圖が眼を引いた、經濟地理を擔當して居る Kaus 氏の控室になつて居る。

要するに、當研究室は、夫程大規模と云ふ程でもなく、狭苦しい感にも打たれたが、又何となくよく整つて居る感にも打たれた。殊に設備許でなく、教授にも單に自然地理方面にのみ偏せず、マウル教授の如き、グレー博士の如き人文方面の人が多いのを見る時、他の大學とは異つて人文地理方面に注意を置いて居る點も察せられ、自分としては寧愉快であつた。

歸途地質のインスチテュート並に地學に無關係でないゲーテの生家をのぞきゴータ・ゲッチンゲンに向ふ。

#### 八、ゲッチンゲン大學

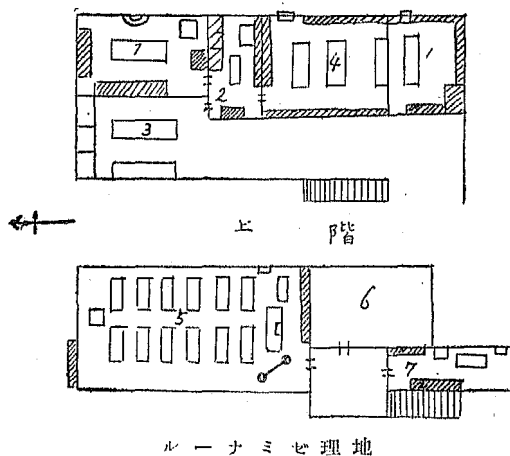
ゲーテの地圖製作所 Geographische Anstalt (Justus Perthes) 縦覧の上、道をかへして、ゲッチンゲン大學を訪ふ。古い大學でもあり、古來地理關係の大家も多く出た處であり、殊に地學通論 *Lehrbuch der Geographie* の著者ヘルマン・ワグナー教授の居る處であるからである。

地理ゼミナールは、大學附屬圖書館の右側の一部を以て之に充てられて居る、表に Geographisches Seminar とかいてある。狭い玄關を入ると、地質學と一所に地學の講義表が掲げてある。主任は Wilhelm Meinardus 教授で、亞細亞を講せられ、助手の Dr. Dries 氏と共に演習に關與し、別に E. Wiechert 氏があり、ポール地方を講じて居ることを知つた。ワグナー教授の後をくんだ大學だけに、フィジカル方面の研究が主となつて居るらしく感じた。丁度主任

の Meinardus 教授が來られたので、一寸面會する事が出來た、然し講義時間であつたから、助手のデリー氏が代て案内してくれた、未だ若い方ではあるが却々綿密に説明してくれた。

左圖(1)は主任教授室、相當に廣い室で、一八八〇年から一九二〇年迄ワグナー教授の居ら

第七十圖



地理ゼミナール

れた處室の中央には大卓子一例を置き、カールリッターの寫眞肖像を、其下にはアレキサンダー・フォン・フンボルトの大きな寫眞がかけてあり。之に對する壁には、アルプスのユングフラウや其他の寫眞がかゝげられ、地圖箱、地理用機械類をも蒐集して居る、地圖はワグナー教授が多年蒐集されたもので、三、四萬枚あると云ふことであつた。地圖、極地方圖、海圖と別けて紙包をつくり、更に紙を以て分類し重保存して居る。古圖が多く、十六世紀頃の世界圖、十七世紀の獨逸國圖など珍らしいものもある様であり、日本の部では、一八〇〇年版の日本圖、京都の古圖、ピーターマン出版の十八世紀頃の日本國圖などが眼についた。教授の御机の傍に他の地圖箱が在り、同じくワグナー教授の蒐集にかゝり、アムステルダム版の古い大形のアトラスが數冊保存されて居た。

(2)は助手室で、机の他周壁には地圖箱を置き、地質圖並に獨逸國の地方圖が蒐集されて居た。

(3)は地圖室で、中央に大卓子形地圖箱、周壁に各種地圖箱を備え、各種地圖を蒐集し、地球儀も各種保存されて居た。

(4)は圖書室で、長方形の室、入口戸の上にはワグナー教授の畫像がいかめしく室内を睥睨して居る。中央に多數の閱覽用卓子を並べ、周壁は書棚を以て充たし、地理通論より次には各國別に蒐集し、日本部に付ては、殊に注意して説明し。雜誌部にては *Zeitschrift für Geomorphologie* が最近ライプツヒから出版された事など注意してくれた。

室を出で階段をのぼると、教室其他尙一、二室ある。階段の兩側壁間には、地學關係學者の小形寫眞が掲げられ、海洋學者の *Otto Krümmel* (1854-1912) や、探險家の *Captain Ross* や *Livingstone* などが注意を引いた。

(5)大講義室で、百四十人乃至百七十人を收容し得、傾斜の緩な階段式教室で、新築であるから未だ綺麗である。生徒机の後に、幻燈機が用意してある、最新式の機械で云々と説明して

居た。教壇は長大で、黒板も数枚備えられ、教壇の傍に、一個の地圖箱が置かれて居る、箱には紙製の小函を並べ、教授用の小圖を學生の數だけ備えたもので、授業の際、學生に一枚づつ配布するのである、用意の周到なるには感心した、何れもワグナー教授の地圖、御手のものだらう此位の設備をするのも道理と思ふた。尙教壇の側には、地圖掛があり、自分の訪問した時には、北極圖が二枚かけられて居た。

(6)はZeichen 室で、演習に使用する室になつて居る。

(7)は地圖室で天井は硝子をはり、明りをとるに備ふ室内には手洗水、製圖用器具機械入(抽出付)製圖板掛圖入等が準備されて居る。

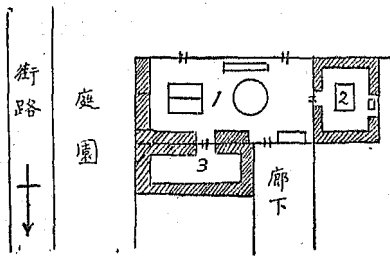
要するに、此の研究室は、階上階下合せて數室を有し、稍地圖の蒐集に熱中し過ぐるの感はあるけれども、フランクフルト・アム・マイン大學の夫と同様良研究室たるを失はない。

九、ワグナー教授訪問 Hermann Wagner  
ゲッティンゲン大學の前の主任教授ワグナー教

授が尙御在世で、然も御宅が近くであると聞き早速御訪問申す。御宅は大學の東北數町の處に當り、インスチチュート前を北し、約三町程行くと Herzberg と云ふ公園風の廣場に出る。道を右にとり、又左に曲ること約一町、右すると Gruner Weg と云ふ通に出る、此の通の東の端は教授の御宅で角を引きまはして鐵柵を施し、老樹茂れる處、二階建のこぢんまりした家屋が建てられて居る。北向に門を備へてある、此處に音にきくワグナー教授が尙存在して居るのかと思ふと、夢の様な氣がした。兎に角ベルをならすと、下女が出て來た、事實教授は御在宅だときゝ大にうれしかつた。早速案内してくれる玄關には、アルプスを初め風景畫が書かれて居る、先年巴里にブリュン教授宅を訪ふた時の如く、流石は地理學者の宅らしく感じた。二階の一室は、教授の室である。下女が戸をあけると、老教授既に机をはなれて、ソファア邊で、立ちながら迎へて下した。握手の禮をとり、ソファアに腰を下し、自分にも腰をかけよとす、

めらる。見ると、却々の老齡、身體の小さい、顔がつこう、老壯な様子迄、先年京都の御宅で御眼にかゝつた故富岡鐵齋先生をつくりである一應の挨拶を述べると、教授は小生の肩を軽くたゝいた何よりも第一に自分は一體幾歳だと思ふか、自分は既に八十六歳(一九二五年にて本年は八十九歳)であるとして、色々と御話し下した。ほんによく見ると、御老年だけに、顔の肉も落ち、眼はうるみ頭髮白く、ひげも長くなつて居る、然し頗る元氣で、反つて壯者を凌ぐ勢、少壯な大家運に接するよりも、ごことなく親しみが有り愉快であつた。教授は、自ら各室を案内の勞をとられ、詳細に説明して下した。教授の御室は、都合三つある、左圖の如くで、(1)が書齋、室は三間に四間もあらうか南向の日あたりのよい室で、室の西と北に連つて小室が一つとつある。室の中央には机と圓形の卓子とを置き、机は普通の机と異り丈高く立つたまゝ仕事をなし得る様に造られて居る、机の上には各種の調査資料が渦高く積まれて居た。卓子の前窓と窓の間にソファ

第十圖



ナグー教授書齋

ーを置く、これが教授と共に親しく話した場所  
で、今更ながら當時を追懷する。ソファの上  
の壁には、教授の令息令嬢等御家族の寫眞が  
けられて居た。周壁は、天井に達する迄書棚  
を以て充たし、雑誌を初め、地學書が滿載さ  
れて居る。教授は  
此書物を指しつ  
ゝ、これは悉く  
雑誌で、Geogr-  
aphische Jahrb-  
uchも第一巻か  
ら全部備つて居  
るのだと話して  
居られた。これ  
こそ教授が終生  
の事業として經營して居られるもので、一八七  
九年(明治十二年)以來現今迄四十九年、約五十  
年間相續いて教授一人で編纂せられて居るもの  
で、教授は其初巻をとり出し、各分類表など讀  
みかして下した。教授は毎朝九時から之が編



纂に従事せられ、少許の散歩をとり、夜は十一時迄必ず研究すると云ふて居られた、既に九十に垂んとする此の老體にして尙此の精勵を見るかと思ふと少なからず教訓となつた。

尙教授は御机の傍に在つた Sidow-Wagner の Methodische Schul-Atlas を示し、之れを自分が一八八八年(丁度明治廿一年ニ當ル)に初めて作製したもので、其後最近迄も出版を續けて居ると、教授の序文の處を示して話されて居た、誠に此の圖は日本に於ても早くから用ゐられ、自分共も教示によりて求めた以來今に座右をはなさない、手ごろによい圖である事は一般に認むる處でありますが、獨逸でも此の圖は重寶がられ廣く用ゐられて居る様で、現に伯林大學でもリユール教授の經濟地理には之が參考圖書の一つに入り、教室には多數備付て學生に使用せしめ、又特殊の部分に付ては一枚ずりを取り希望に應じて配布して居た。

一通り説明が終ると次の室(圖2)を案内下した小さい室で周壁書籍を以て充たされ、室の中

Professor Dr. Hermann Wagner  
22. Lektor der Deutschen Geo-  
graphie geb. 23 Juni 1840.

Dr. 28. Nov. 1925-

名 署 授 教 ナ グ ヲ

奥に一個の卓子を置きカタログ用カードが置かれて居た、紙製の函につくられて居る。教授は一枚のカードを示し、日本部を例として説明され、分類は大體を色別にして整理して居るとて詳細に説明下した、餘り多くもない藏書の分類には簡單でもあり適當な方法と思ふた、此室の正面書棚の間に

一個の石膏製胸像が眼につく、よく観ると、カール・リッターの肖像である、何處に參つても、リッターの寫眞なり胸像なりが飾られて居る、流石は地理學の始祖、かくも獨逸地學者の崇敬を受けて居るものかと愉快であつた。尙御一族の寫眞などもかゝげられ、又室の一隅には日本製の刺繡の偏額が硝子張にして保存されて居た餘程古びては居るが確に富士に帆船の景である早く日本から來た留學生どもの寄贈されたものであらう。夫から書齋の北の室を案内される、細長い室で此處も書物を以て充滿されて居る、教授は之に付ても草々と説明を下した、歐米人

は總じて書物を裝飾に供する風がある、この家を觀ても多少とも藏書のない家はないが、専門の書物のみでかくも蒐集されて居るのを見ては流石に其熱心さに感服せざるを得なかつた、教授の餘りの御熱誠に思はず長居した、再三御禮を述べて歸る、別にのぞんで記念の署名を願ふと、喜んでペンを走らせ右の如く記された。薄雪のゲッチンゲン市内をドームからハウプトストラッセと、再大學附屬圖書館の前を通つて宿に歸る、尙見物すべき所も多からうが、此の目出度老大家に接したのを何よりの土産として一路伯林に歸ることにした。

## 濟州島火山岩中の斑晶 (二)

原 口 九 萬

前々(十一月)號に於て漢拏山頂より鑄出したる玄武岩の斑晶の物理學的性質を杜撰乍ら記述し

たが、其等の化學性質を述べることにする。

(一) 漢拏山玄武岩中の輝石